

第2回「エコシティたかつ」推進会議 摘録

日 時：2008年8月6日（水） 14:00～17:10

場 所：高津区役所 第2/第3会議室

1. 開会

前回会議を欠席された委員の紹介を行い、簡単な挨拶をいただいた。その後、資料確認を行った。

2. 前回会議の振り返り

事務局より、摘録（資料1）及び意見交換で出た意見（資料2）について説明があり、前回会議の流れと意見概要について振り返った。

3. モデル事業の進捗状況

事務局より、モデル事業として行っている「緑のカーテン」大作戦の進捗状況について報告された。

<「緑のカーテン」コンテスト>（資料3）

写真を募集し（8月1日～9月12日）、10月18日（土）に行われる「市民活動見本市2008」内の「緑のカーテン報告会」で、表彰式を行う。選考委員会は、エコシティたかつ推進会議学識委員、及び公園緑地部長、高津区長で構成する。

<ゴーヤーによる「緑のカーテン大作戦」効果測定>

区内公共施設及び区内一般家庭の「緑のカーテン」の温度測定を行う。区役所等については、環境局公害研究所の協力のもとサーモグラフィによる測定を行い、その他については、放射温度計を貸し出し、温度測定を行ってもらう。

<フードマイレージゼロ「高津区役所産ゴーヤー」を食べよう！！>（参考資料）

区役所庁舎内においてもゴーヤーによる「緑のカーテン」を実践しているが、区役所で収穫されたゴーヤーを使ったメニューを、区役所5階「レストランたかつ」で、8月の毎週水曜日に提供する。

また、岸委員長より、モデル事業とアクションプランの違いについて質問があり、モデル事業は今年度事業であり、アクションプランは「エコシティたかつ」推進方針に基づいて、次年度以降行うものであると事務局より回答があった。

4. 推進方針の内容と体系の検討

まず、事務局が、前回の議論及び、岸委員長のアドバイスをもとに作成した資料（たた

き台)について説明し(資料4/5/6/7)、岸委員長が適応策の重要性や地域特性を活かした視点での方策の必要性(資料9)等について、補足説明を行った。資料に関する質問を確認した(以下、修正箇所)。

- ・(資料4)「環境に対する意識の高まり・市民活動の展開」の文章において、堆肥リサイクル、生ごみリサイクルなど...は同じことなので、落ち葉・生ごみリサイクルなど...にする。
- ・(資料4)アメダスの図タイトルを、1時間降雨量が50mm以上になる年間延べ件数に修正する。
- ・(資料9)流域とは、雨の水が水系に集まる範囲をいう、に修正する。

続いて、理念や基本目標、戦略、体系を中心に、推進方針の内容について検討した(以下、議論要旨)。

- ・高津区らしい、顔の見える戦略をつくった方が良いのでは。
- ・ローカルアジェンダ21を参考にしてはどうか。
- ・具体の地理的・物理的な流域レベルでの考え方は素晴らしい。
- ・スケールの乖離がある。世界レベルと区域レベル。その間が抜けている。
- ・区の資源を集中するのは、実効性の高いところに資源を集中させるべき。
- ・今までつながっていないものをつなげることも大事。実行力の加速度を高める効果がある。失敗してもいいから、取り組みの機能に着目したやり方もあるのではないか。
- ・体系の中で、「戦略」の部分が引っかかる。こういう所に気をつけてやっっていこうという留意事項にしか見えないので、その場合は「戦略」という言葉は使わない方が良い。
- ・目標を達成する上で、市内にあるどのような資源を組み合わせることができるか考え、一番効果的な方法を考えていくことが必要である。
- ・「戦略」に何を書き込むか考えると、「方向」(方針)としてはどうか。
- ・「低炭素社会の実現」は非常に抽象的である(日本や高津区が、どんなにがんばってもどうしようもない問題である)。それ以上に、適応策(防災や緑の保全)が大切である。
- ・「低炭素社会の実現」の中には3Rが隠れている。これが前面に出てしまうと、全てを集約してしまうのであえて入れていないが、会議で意見が出るのであれば「低炭素・省資源社会の実現」としても良いと思う。
- ・空間スケールの問題。社会的ジレンマ(地域間の押し付け合い)がおきている。グローバルとローカルはつながっている。高津区20万人は平均的な中規模都市であり、高津区がやることに意味がある。温暖化への対応はローカルなレベルから21世紀型の都市構造を変えていくことである。
- ・地域における多様な資源を下から積み上げていく(個人の庭の緑をつないでいくなど)、実効性の高いアクションプランは、上からと下からの両方で進めていく必要がある。
- ・温暖化の災害は水から起こる。「低炭素社会の実現」というだけではもういかない。
- ・地域の中でやっていることを、どうやって効果的につなげて、集約させていくかが課題

ではないか。資料 6 の書きぶりを変えていけば良い。

- ・推進体制に結びつける計画、評価できる計画が大事ではないか。
- ・アクションプランを高津区レベルと全市レベルに分けてはどうか。また各プランを地図におとしてみてはどうか。
- ・神奈川県に関連条例はどのようになっているのか。
- ・県も条例を検討中であるが、市も計画を改訂中、条例化を検討中である。県とは同等かそれを上回るものになると思う。いずれにしても整理されていくので、あまり気にしなくて良い。
- ・川崎市も東京都のように、事業所に罰則を設けるのか（Cap & Trade するのか）。
- ・CC かわさきでは川崎の強みや特徴を活かすとしている。二酸化炭素排出量の 80% が産業部門からであるが、それが一概に悪いわけではない。省エネ商品や素材産業など、省資源につながるものもある。まずは企業の良い面を見ていき、Cap & Trade はその次の段階であると考えている。
- ・行政計画に限定するのか。市民、NPO、企業が行うものを含むのか。どちらかで推進体制は変わってくる。コミュニティレベルで何かやるかということであれば、行政計画ではなく、各主体が自発的に推進プロセス、検証プロセスに関わっていく（マルチセクタープロセスである）社会計画になるだろう。
- ・評価の中で、環境マネジメントシステムを使っていくことになるには。
- ・コミュニティ単位で自発的に動かしていくのは幻想だと思う。また、評価をコミュニティでやると、行動する人はいなくて、評価する人ばかりが増える。動きうるアクションプランを出すのが先と思っている。ここに出席されている方々の周辺（市民ベース、企業ベース）で、アクションがあるといいと期待している。
- ・（資料 8 について）資料 8 は市長説明用の資料として作成したものである。各局の取り組みと連携し、地域の資源をふまえた計画としたい。
- ・一市民、主婦の目線からすると、理念は立派過ぎるように感じる。川崎・ごみ連の私たちが考えていることは生ごみリサイクルであり、橘の農とつなげたい。基本目標の ・ ・ のどれにもつながるので、横断的な活動展開ができる方針としてほしい。
- ・高津区の特徴って何だろうか。違いをわかりやすくして、「高津」というネーミングを入れられるような計画にしたい。
- ・資料 4 によると、川崎市内で環境分野の団体が 120 あると書かれているが、何をやっているのか。高津区でやっていないものを取り入れてはどうか。
- ・次回、基礎調査の資料編（団体リスト）を配布する。
- ・目に見えるアクションが出てきた段階で意見が言える。市民に分かりやすい計画にして欲しい。
- ・花を一つつくるのでも、石油を使って春咲かせる花を夏咲かせるのではなく、環境に強い草花を植えることや、鉄砲水でどうやって水を分散させるかなど考えている。

- ・高津区の斜面緑地の管理の仕方という形で提案したら良い。どういう森、斜面緑地にしたら、土砂災害に強くなるか、具体的なアイデアをまとめて、区全体に広めていく。
 - ・かえるプロジェクトに取り組んでいる（参考資料参照）。地域で資源化できるのは、生ごみとてんぷら油だけである（紙ごみなど他のものは地域外に出さないといけない）。地域の外に出さないで、地域内資源循環することが重要。自分の生活にメリットとしてかえってくるはず。「花咲く地域エネルギープロジェクト」として取り組みたい。また、廃棄物をどのように資源化するかが問題。資源として使えるものを認識して欲しい。
 - ・急速に消える斜面緑地をもっと残すことが大事。どうしたら残していけるのか、すぐに対策を立てる必要があると思う。市民1人あたりの緑地面積は、目標の30%をきり24%となっている。具体的にどこを保全するのか、地域の資源を知るため、斜面緑地カルテを参考に、地域の水と緑の地図づくりをまち協で行っている。
 - ・今までみんながやってきたことをベースに、きちんとした方針を持ちながら、広がりがあるアクションプランにして欲しい。
 - ・目標の立て方は、区民に分かりやすいと思う。
 - ・今の緑を減らさない、植えっぱなしではなく維持するなど、区民の意識が大事。
 - ・学校の先生などに、正しい知識を広められるような機会を増やす必要がある。
 - ・市民、行政だけではなく、ノウハウを持った人と一緒にやりたい。サポートする専門家と市民の架け橋も重要。
 - ・普通の市民に分かりやすいような書き方にすると良いのでは。
 - ・学識だけではなく、NPOが仕事として関わることも大切。
 - ・3つの基本目標は良くできている。
 - ・アクションプランは3つに分けてやるとやりにくい。
 - ・検討課題はなぜ5つになったのか。自然エネルギーという言葉も？
 - ・自然共生型はどこまで目指せるのか。実際にはどのようなことができるのか。
 - ・循環型を区内で完結するのは難しいのではないか。
 - ・高津区の地形は、平坦地と丘陵地の分岐点で、それぞれの特徴があり（「高津らしい」）川崎市全体のモデルとなるのではないだろうか。そのため、高津区での先駆的な計画策定は価値がある。
 - ・多摩丘陵の緑地をいかにのこすか。緑の基本計画では、300m²以上の個人の庭をまちの庭とし、税金の減免など行っている。
 - ・緑地保全の方法として、買い取り以外の他の方法があるのではないかと考える。騒音などのように、緑そのものに、何らかの権利は与えられないものだろうか（見て楽しむ鑑賞権/使用権など）。
 - ・地図に意図を持ったフィルターをかける。
- 摩川に虹がかかっているところをほとんど見たことがない。無理であるのは分かっているが、多摩川に木を植えることはできないか。

- ・都市型の洪水に備え、個人では難しい雨水利用等（道路のアスファルトをはがす等）の取り組みも提案すべきだと思う。
- ・「高津区だから」を大切に、小回りがきく、顔の見える関係での取り組みの推進を期待。
- ・高津区内 15 校の小学校のうちビオトープがあるのは 2 校。ビオトープを作る時の予算の問題、また管理は専門家が関わらないと無理である。
- ・川崎市内には水田がないため、現状としてバケツで育てるしかない。コンクリートの田んぼは 9 校あるが、地元の人に関わってくれないと維持管理が大変である。
- ・観察池は 11 校あり、ビオトープとあわせ、池がないのは 2 校。屋上緑化は 2 校、緑のカーテンは 5 校、ソーラーパネルは 1 校、雨水利用は新設の学校にあるかもしれない。
- ・学校での環境の学習といえば、社会科の授業で公害対策を中心として行っていた。生活や総合学習の中で、社会、理科の発展的学習が取り組めるのではないか。
- ・地域にあった学習の仕方が重要。
- ・是非、学校をモデルとした取り組みを行いたい。NPO が持続的に関わることが継続のキーだと思う。
- ・ミットヨでは、ISO14000 シリーズや省エネ法に対応した活動をしている。
- ・トップランナー基準の中で、最新の機器を取り入れることが上げられている。エネルギー削減の効果があるが、費用対効果を考えると投資までなかなか到らない。
- ・公共の集まるところに自然エネルギーを使ってはどうか。
- ・「共有化」...社有車の削減やカーシェアリング、電気自動車のスタンドを街中に置くなど都市型の取り組みをしてはどうか。
- ・「見える化」...数値化できるものは数値化して、区民が見えるようにチェックしていく。
- ・有機的、効果的なプラン、プラス実効性のあるプランにしたい。
- ・世界的な状況を踏まえ、一人一人のライフスタイルが変わっていくことが大事。
- ・20 万人の都市、取り組み次第で重要なものになる。
- ・企業から意見ももらい、プランに盛り込みたい。
- ・適応策につながっていくプランの組み立てが大切だと思う。

5. 会議のまとめ

岸委員長により、以下まとめを行った。

- ・資料 4 は、会議のための資料であり、報告書にそのまま掲載することはしない。
- ・資料 7 の体系は、概ね合意した（文言は修正する）。
- ・高津区らしい書きっぷりを方針にいかにかにできるか、今後の課題とする。
- ・目標 、 、 は別々ではなく、アクションプランでつなげていく。
- ・アクションプランを前もって委員の方にメモにしてもらう。

自分が主体となってやりたいこと

自分ではできないが、こんなことがあったらいいなということ

今日の会議で言い足りなかったこと
来週中に事務局よりシートを送付、8月末までに返信

6. 事務連絡 / 次回の会議日程

事務局より、以下、事務連絡を行った。

・各委員会への委員派遣要請について

岸委員長と相談し、下記委員の方々を派遣した。

高津区区民会議：横山滋委員

川崎温暖化対策推進会議理事：横山滋委員

川崎温暖化対策推進会議運営委員：吉田委員

地球温暖化対策地域推進計画市民合同部会：伊中委員

・高津区まちづくり協議会主催「歩こう、知ろう！高津の水と緑」プロジェクトのスタートイベント（岸委員長の講演）について

また、次回の会議については、9月30日（火）15:00～、開催予定とする。

以上